特集

実践教育で即戦力に

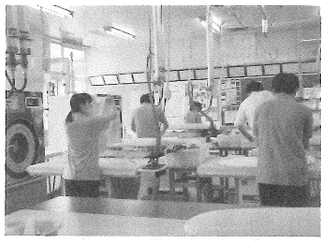
第35回時事通信社「教育奨励賞」努力賞受賞校⑫

●青森県立青森第二高等養護学校

「おはようございます！」。6月中旬の朝、校舎の内外で、元気なあいさつの声が響き渡った。軽度の知的障害がある生徒の職業教育に重点を置き、実践的な授業を行うのは、青森市の青森県立青森第二高等養護学校（甲田隆校長、生徒数91人）。二高養は1994年度、県内で初めて産業科を設置した特別支援学校として開校した。ロールプレー型授業や就労を見据えた実習を通して、社会に出るための経験を多角的に積み、就業先での即戦力を養う。「なぜか？」を考えさせ、他者と協力しながら自分たちの力で目標を達成することで、自己効力感を育んでいく。進路指導では、生徒の希望を第一に据えて、教員による特性の見極めや企業への聞き取りを通してマッチングを進める。就職率は5年連続で9割超、職場定着率も8割を超える。A型と呼ばれる「就労継続支援A型事業所」や一般企業の障害者枠採用での就職率は、県内平均で36％に対し、二高養ではほぼ全員がこれらの形式で就職する。甲田校長は「生徒たちが自らの能力や特性を発揮し、社会的、職業的自立のために技術研さんしてもらいたい」と意気込む。（肩書等は取材時）

実践で働く力を養う

二高養での実践授業は「専門教科」「流通・サービス」などで構成される。「専門教科」では週8時間、グループごとに手を動かしながら働き続ける力や働く素地を養う。多様な経験を積むために、1、2年生では参加する科目を必ず変えるという。3年生の授業を見学すると、6～8人のクラスに教員2人が付いて黙々と作業に取り組んでいた。「家政」では、地場産業への理解のために、県産品や伝統工芸を活用。生徒の発案に基づき物品製作に励んでいるという。例えば、伝統的な刺し子「津軽こぎん刺し」をあしらったポーチや針山などだ。「クリーニング」では、希望者が国家資格取得を目指す。実習室にはプロ仕様の機器を導入し、伝票作成やアイロンがけなど役割を分担して取り組む。国家資格を参考にした校内試験に合格すると、教員らの洋服にアイロンがけができるようになるなど、細かな目標を設定する。



専門教科のクリーニングでアイロンがけに取り組む生徒たち

「流通・サービス」では、外部講師を招いての講習や近隣事業所での実践を通して、さまざまな職業の基礎技能を身に付ける。1年間を通して清掃、喫茶、福祉、職業技能の4分野すべてに取り組み、2年生は「青森県特別支援学校技能検定」での級取得を目指す。「清掃」では、検定と同様に制限時間の中で実技課題をこなす級友を、傍らで見守る生徒の姿があった。客観的に見ることも学びになるため、しっかり観察するように指導する。「福祉」は、就職先として福祉施設が増えてきたことを受け、教員の発案で新設した。決められた業務をこなすだけでなく、老化による視力低下など、入居者らの特性を座学で学ぶ。足浴時に話し掛けられて、緊張して動けなくなった卒業生の話を聞いたことで、入居者に言葉を掛けたり、笑顔を向けたりするといったコミュニケーションも指導するように。「場の空気や場面に応じて振る舞うのが一番難しい。ロールプレーをして『分かる』を増やしていく」と教務主任は話す。

検定の級取得は大きな目標だが、実務現場は検定通りには進行しない。3年生になると、失礼のないよう接客することを目標に、応用編に取り組む。「喫茶」では、近隣の大学や町民会館でカフェ業務を実演。大学生や来館者に、飲み物やサービスの茶菓子を提供する。厨房係や注文取りといった役割分担から当日の設営まで、運営を生徒たちにすべて任せる。考える力や協力して取り組む力、一通りやりきることで、達成感や自信を得る。来客アンケートには「常設にしてほしい」「丁寧な接客だった」などの声が集まった。

これら実践を通して得た力を発揮するのが「産業現場等における実習」だ。年2回、2～3週間実施し、1年生の後期から校外で実習する。3年生では、本人の習熟度や企業側の事情にもよるが、就職を前提とした形で実施することを、生徒本人にも企業にも伝える。受け入れ先は、生徒自らに業種や会社を選んでもらい、教員が企業と交渉する「開拓」で確保。他校では、主に進路指導主事が担当するところ、二高養は担任が取り組むのが特徴だという。これまで、約400の事業所を開拓した。企業との面会時に、日ごろの様子を撮影した映像などを示しながら、生徒の能力やできる仕事の内容などを提案する。

開拓を含めた実習は、教員の力の見せ所だ。華やかな職場や活躍する先輩の姿に憧れる傾向はあるが、本人の得手不得手を踏まえ、軌道修正を図ることもあるという。ただ、心残りがあるまま進めると離職につながりかねない。そこで、事前に達成してもらいたい課題を伝えるなど、目標意識を持って取り組んでもらうという。実習先にも、一社員として力になれるのか、ありのままを評価してもらうように依頼する。保護者には、必ず一度は、実習先を見学してもらう。働ける場があるのか、職場でちゃんとやれるのか心配する保護者らも、懸命に頑張るわが子を見て安心するという。

実習の事前学習として行う「スキルアップ」では、清掃やパソコン入力など実習先の業務に近い作業に取り組む。作業手引きは、いずれもテキストベースだ。卒業後に困らないために、実社会に近い形にしているという。教員からの一方的な指導にせず、生徒が主体的に考えることを重視して、実習前の目標設定や事後の振り返りを、自身で言語化して廊下に掲示する。卒業生を受け入れた就業先からは「こんなにできると思わなかった」「いなくてはならない存在」「コツコツ頑張っている」との声が聞かれるという。教務主任は「厳しいかもしれないが、二高養の看板を背負っているとの思いで頑張ってほしいと伝えている」と話す。

教員、生徒の意識を変える

甲田校長はこれまで、知的障害や肢体不自由、病弱教育に携わって児童生徒たちと向き合ってきた。「残念ながら、知的障害に対して、いまだに社会の風潮としてどうしても下に見ることがある」と指摘する。「指導の場面でも上から目線だと感じ、そこから直していかないと子どもたちの笑顔が生まれないと考えた」と話す。18年度に着任以来、教職員自らが生徒の手本になるようにと意識改革を進めてきた。「前後の文脈があるとしても、誰にどう聞かれても問題のない生徒対応をするよう伝えている」。認知力と人間力を同一視してしまう風潮がある中、生徒たちは自分が尊重されることで、自信と誇りを持ってもらいたいと考える。卒業後も、趣味を持って地域で楽しく暮らせるようになってほしいと部活動にも力を入れる。「県大会や全国大会でも入賞しており、これらで自己効力感を高めてもらえれば」と話す。一つ自慢してもよいだろうか、と前置きした甲田校長は「学校評価で生徒の満足度が、年々上がってきている」とうれしそうに話した。3年間の追跡調査で「この学校に入学して良かった」「楽しい学校生活を送っている」といった項目で高ポイントを獲得し、教員たちの生徒への深い理解や失敗後のフォローなどへの満足度も上昇傾向だ。

二高養には寄宿舎があり、全校生徒の半分以上が生活している。従来の位置付けは、自宅から通学が難しい生徒の修学保障だったが「生活力を付けたい」との保護者や本人の意向があり、近年は、青森市内在住の生徒も受け入れている。週末などは定期的に実家に帰省するため、実習先への通いや通勤に役立っている。卒業後の進路が内定すると、就業先のスケジュールに合わせた生活を送る。寄宿舎生活によって身辺整理など生活技術が身に付き、異なる学年で部屋を使うことで、チームワークやリーダーシップが育つという。寄宿舎を担当する教員は「共有スペースの掃除当番など、自分たちで声を掛け合いしっかり取り組んでいる」と振り返る。「15歳で親元を離れて生活するだけで生活力は十分に高まる。生徒にとって教えられる時間が長いので、寄宿舎にいることだけで力が付くようにしたい」と意気込む。

（小室翔子＝青森支局）